



## キョウト・スコープ

# 難聴者の「聞こえ」手助け、ヒアリングループ 会議室 やホールで補聴器の雑音排除 / 京都

毎日新聞 2017年5月10日 地方版



京都市では卓上型のヒアリングループも導入されている。区役所の窓口などに置き、簡単に利用できる＝京都市障害保健福祉推進室で、榎原雅晴撮影

<kyoto-scope>

### “おもてなし”京都で普及を

難聴者の「聞こえ」を手助けするヒアリングループ（磁気誘導ループ）をご存じだろうか。会議室やコンサートホールなどに設置すると、補聴器で雑音のほとんどないクリアな音が聞こえる。京都市が昨年、11の区役所すべてに導入したほか、京都コンサートホールやロームシアター京都などでも既に設置済み。だが古くから市民生活に浸透している欧米などと比べると、日本ではまだまだ認知度が低く、普及のネックになっている。難聴者団体は「ヒアリン

グループが広まれば町を歩きやすくなる。2020年の東京オリンピック・パラリンピックを控え、“おもてなし”をうたう京都でこそ率先して認知度アップを」と訴えている。【榎原雅晴】

劇場や会議室、駅など周りが騒がしい場所で補聴器を使うと雑音まで増幅され、肝心の音声聞き取れない。それをカバーする方法として注目されるのがヒアリングループだ。必要な場所をループ状のアンテナで囲み、マイクの音を電気信号として流すと磁界が誘導され、その変化を補聴器が感知。マイクに向けてしゃべった人の声だけが増幅される仕組み。電話を聞く際に使う「Tモード」が多くの補聴器に備わっていることを利用した。ヨーロッパなどで数十年前から広がり、教会や劇場、駅や空港、タクシーなどで利用されている。

日本でも役所や学校などのほかにも、コンサートホールや野球場の応援席にループアンテナを埋め込み、雑音に悩まされずアナウンスを聞ける施設が徐々に現れだした。2009年には、裁判員制度導入を機に最高裁が全国60カ所の裁判所に一括導入。だが一般市民だけでなく、難聴者の間でも認知度が低いのが現状という。

高度難聴者で、6級の障害者手帳を持つNPO法人京都市中途失聴・難聴者協会副理事長、中川浩さん（56）は「私は3歳から補聴器を付けているが、大人になってヒアリング

ループで相手の声がクリアに聞こえるのに驚いた。しかし補聴器を使っている人ですら、それを知らない人が多い」と残念がる。その理由として中川さんが挙げるのが“福祉の谷間”の存在だ。

日本では重度・高度の難聴者を障害者認定しているが、欧米先進国では中度・軽度相当の人たちも認定されるケースが多いという。

「難聴は福祉の対象という認識があり、補聴器を扱う店には機能を正しく説明する義務がある。しかし日本ではヒアリングループが使える環境がまだ少ないので説明を怠ることが多い。ヒアリングループ設置を増やし、普及啓発が必要です」

日本で障害者認定を受けている難聴者は約35万人。だが福祉のケアを十分に受けられない“谷間”にいる軽・中度の難聴者が約600万人いるというのだ。

ヒアリングループの普及を訴えている中度難聴者の三好徳昌さん（73）＝京都市山科区＝は「耳が聞こえづらくなると会話も減り、外出もおっくうになる。しかし講演会や音楽会を家族と一緒に楽しめるなら、出かけようという気持ちになる。また会社でも役員クラスの方で会議の音が聞こえず困っている人が多い。こういう多くの人びとの活動の幅を広げる」と、ループの可能性に期待している。

全国の裁判所や劇場、ホールなどに設置実績のある専門会社「ソナール」（下京区）は路線バスや鉄道での実証試験もしている。社長の佐野英一さん（68）は「古めかしいアナログの技術だが、費用もさほどかからず“聞こえ”の支援では国際標準になっている。欧米では空港や駅の切符売り場、タクシーなどにも設置され、難聴者もアナウンスがはっきり聞こえ安心できる」と指摘する。

東京オリンピック・パラリンピックを機に関心を持つ鉄道や空港会社が増えたものの、先進国の中で日本は取り組みが遅れている。京都にも各国から多くの難聴者がやってくるだろう。彼らにとっても「歩くまち・京都」であってほしい。

---

## キョウト・スコープ【kyoto-scope】

万華鏡（kaleidoscope）を応用した造語。京都で起こる多彩な事象を取材し、随時紹介します。

〔京都版〕